

② 「これからも生きていく」

まだ私が大きいランドセルを背負っていた小学生の頃、ある一匹のザリガニを飼い始め、ザリーちゃんと名付けてそれなりにかわいがっていた。真夏は、黙った太陽に見つめられながら水槽を洗うのが大変だったが、月に一回、脱皮をする様子はどこか神秘的で好きだった。いつの日か、残念ながらザリーは死んでしまったが、そんなザリーと似たような赤色を纏う日が私にもやって来たのだった。

「はーい、こっち向いてー」「ほらほらーこっちだよー」五月のそよ風の中、飛んでいるお母さんの声。カメラを構えて一生懸命、カメラを見るようにと声をあげている。目線の先には、生後三か月くらいの赤ちゃんが；いや、生後？年後の私のおばあちゃんである。今日は私の成人式の前撮りがあり、初めて振袖を着たのでその姿を見せるため、祖父母に会いに来たのだ。おじいちゃんとおばあちゃんと私で写真を撮ろうとするのだが、私の振袖姿に感極まったおばあちゃんは、瞳を潤ませながら、カメラが向けられているにもかかわらずつと私のことを眺めているのだった。おばあちゃんのお茶目な話に聞こえるかもしれないが、私はこの時の、おばあちゃんが私の成長を心の底から喜んでる姿を思い出すと、リボンできゅつと結ばれるように、心が愛おしく締め付けられる。そこには、そんなおばあちゃんのことを、手をたいたって笑っている家族もいて、もう言葉にならない、というかそもそも表現する言葉が存在しない感情たちがそこら中に漂っていた。私の人生はこの人たちのその手のひらから始まったのだ。そんな中、ふと、私は感じる。風が頬をなでるようにふわりと気付く。これこそ、美しい、というもののなのだろうと。誰かの成長を喜ぶということは、こんなにも素敵なのだ。なんというか、ダイヤモンドのような豊かな輝きというよりも、晴れた日のプールの水面のような煌びやかさがある。

ところで、私は誰かの成長を喜んだことがあっただろうか。いや、きつとない。きらきら光るプールがあれば一目散に飛び込んでしまいそうなくらい奔放に生きてきた。どちらかといえば、誰かの成長に対しては、喜びよりも悔しさをを感じる競争のような記憶がよみがえり、その未熟さにちよっぴり恥ずかしくなる。部活の後輩が上達していったときは、私だつて頑張っているのにと悔しくなり、訳も分からず、怒りすら覚えたこともあった。しかし、ここで振袖を着た純粋な少女(私のことだ。)が顔を出す。なぜ悔しいことは恥ずかしいことなのだろう。誰かの成長に対して負けるものかと意気込むのを抑えて、穏やかに喜ぼうと努力することは、本当にあのおばあちゃんの美しさに繋がるのだろうか。

「あんたもうちよつと姿勢よくしなさい。」
母に言われて背筋を伸ばす。すると、振袖を着た私はやさしく答える。悔しさだとか、怒りだとか、そういう卑しいような感情は、時間をかけて、喜びや楽しみを感じる心を作っていくものだ、と。

家に帰って脱いだ振袖は、脱皮した殻のように見えた。